

2004 年度 第 19 回日本鳥類標識協会全国大会



2004 年 11 月 27 日～28 日

宮城県伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター

主催 日本鳥類標識協会

後援 宮城県 若柳町 築館町 迫町

宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団

2004年度 第19回日本鳥類標識協会全国大会 日程

○ 2004年11月27日(土)

12:30 受付開始(宮城県伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター)

13:00 開会宣言

歓迎の挨拶	日本鳥類標識協会全国大会宮城大会実行委員長	竹丸勝朗
会長挨拶	日本鳥類標識協会 会長	風間辰夫
来賓祝辞	宮城県若柳町長	菅原郁夫殿
	宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団理事長	川合 宏殿

13:30～14:50 シンポジウム(東北地方における標識調査)……………2p

1. 飛鳥(山形県酒田市)における標識調査:大沢八州男(日本鳥類標識協会)
2. 岩手県内で行われている鳥類標識調査の紹介および
盛岡市雫石川河川敷における標識調査結果:作山宗樹(日本野鳥の会盛岡支部)
3. 足島におけるウトウの標識調査:竹丸勝朗
4. 海岸林での標識調査:杉野目斉
5. 宮城県鳴瀬川河口ヨシ原における標識調査-2000年～2003年(4年間)の記録-:菊田英孝

15:00～16:00 総会

16:00～17:00 一般講演……………9p

1. イワツバメの減少化と年齢:武下雅文
2. 標識調査で確認された鳥類の特殊な個体変異:梶田学(京都府)
3. 恥骨による性の識別の試み:茂田良光

18:00 懇親会(ホテルサンシャイン佐沼)

○ 11月28日(日)

5:00～7:30 エキスカーション(マガンの朝の飛び立ち)

9:00 記念撮影

9:15～10:15 一般講演……………13p

4. 新潟県関屋海岸におけるトラツグミの移動傾向:千葉晃(日本標識協会にいがたグループ)
5. 新潟県瓢湖で越冬するオナガガモの性比とその変化(2003/2004):千葉晃(日本歯科大学)
6. 新潟県瓢湖でみられたオナガガモ *Anas acuta* (雌)の越冬地換羽例:本間隆平(瓢湖標識調査グループ)

10:15～10:35 ポスターセッション……………19p

1. 印旛沼の鳥類:桑原和之(千葉県立中央博物館)
2. 印旛沼のチュウビとハイロチュウビの生息状況:浅川裕之(千葉市野鳥の会)

10:35～11:30 一般講演

7. 北日本から千葉県・鴨川漁港へ飛来が確認されたカモメ類について:前原一統
8. AN ASIAN BIRD-BANDERS MANUAL について:須川恒
9. 密猟問題と鳥獣保護関係法律の運用:風間辰夫

11:30 閉会

絵:箕輪義隆

シンポジウム
東北地方における標識調査

11月27日
13:30～14:50



G. Minowa '88

飛島（山形県酒田市）における標識調査

大沢八州男（日本鳥類標識協会）

飛島は、山形県酒田市の北西約 3.9 Km の日本海上に位置するはなれ島で、周囲約 1.02 Km、島の最高点は 6.8 m、沖合いから眺めると平たいテーブル状に見える。台地状の島の上部は照葉樹のタブノキやクロマツの林で覆われ、畑の耕作地が点在している。また、周辺には御積島、烏帽子群島など大小様々な島もある。

渡り鳥の中継地としてよく知られており、本土では確認の少ない種類も含め、これまで 300 種近く観察されている。また、1 万羽を超えるウミネコが繁殖しており、御積島と館岩はウミネコの繁殖地として国の天然記念物に指定されている。

飛島における標識調査は、1982 年から実施され、2003 年までに約 90 種、約 16000 羽が放鳥されている。調査は、主に春と秋の渡りの時期におこなわれている。特に、1987～1993 年の 7 年間、山階鳥類研究所が行った「小鳥類の春の渡り調査」では、約 10000 羽が放鳥され、日本海側の春の渡り鳥に関して多くの新知見が得られたことが、「鳥類観測ステーション報告」に載せられている。

稀な鳥種の標識例として、アカガシラサギ、ヨーロッパピンズイ、オオモズ、ヤマヒバリ、カラアカハラ、ムジセッカ、カラフトムジセッカ、キマユムシクイ、マミジロキビタキ、ムギマキ、オジロビタキ、シラガホオジロ、シロハラホオジロ、コホオアカ、キマユホオジロ、ミヤマシトド、チャキンチョウなどがある。

これまでの回収例は 24 例あり、飛島外放鳥飛島回収 11 例、飛島放鳥飛島外回収 13 例。種類としては、アオジ 8 例、ウグイス 4 例、メジロ 3 例、ルリビタキ、シジュウカラ各 2 例、ジョウビタキ、トラツグミ、ツグミ、カシラダカ、ベニマシコ各 1 例となっている。興味ある回収例として次のような例がある。

- ・ ウグイス 飛島→（秋、1 ヶ月後）→沖縄県石垣市
- ・ ルリビタキ 石川県能美郡根上町→（春、3 日後）→飛島
- ・ " 北海道函館市→（秋、7 日後）→飛島
- ・ ジョウビタキ 飛島→（秋、11 日後）→茨城県日立市
- ・ アオジ 北海道札幌市→（秋、13 日後）→飛島

岩手県内で行われている鳥類標識調査の紹介 および盛岡市雫石川河川敷における標識調査結果

伊達功¹・西岡裕介¹・青山一郎^{1,2}・久慈敏²・松下敬行²・水戸里樹²・坂口斉²・
作山宗樹¹・由井正敏³・鈴木祥悟⁴・中村充博⁴・関川實⁵・千葉一彦²・佐藤文男⁶

¹：日本野鳥の会盛岡支部、²：岩手大学野鳥の会 OB、³：岩手県立大学総合政策学部、
⁴：(独)森林総合研究所東北支所、⁵：日本野鳥の会宮古支部、⁶：(財)山階鳥類研究所

【岩手県内で行われている鳥類標識調査】

岩手県は都道府県では北海道に次ぐ面積を有するが、東北地方の他の県同様、鳥類標識調査が継続して行われている所は少ない。現在調査が行われているのは、秋の渡りの時期に、内陸部の2箇所（盛岡市下厨川の(独)森林総合研究所東北支所構内、盛岡市下太田の雫石川河川敷）と、太平洋に面する沿岸部の2箇所（宮古市八木沢、釜石市片岸町の鵜住居川河口）である。繁殖期には内陸部の2箇所（玉山村姫神および滝沢村柳沢の各鳥獣試験地）と沿岸部の2箇所（宮古市日出島、釜石市三貫島）で行われている。

このうち、玉山村と滝沢村の各鳥獣試験地では、(独)森林総合研究所による研究（鳥類群集の保護と森林施業）の一環として調査が行われている。日出島と三貫島ではウミツバメ類の営巣地保全研究の一環として、(財)山階鳥類研究所の佐藤らによって調査が行われている。このうち三貫島は2004年から環境省のモニタリング1000対象地となった。

内陸中央部～南部、および沿岸北部では全く調査は行われておらず、調査に携わる人材の確保と調査地点の設営が現在の課題である。

今回の発表では、これらの調査地で行われている調査の様子について紹介する。

【盛岡市雫石川河川敷における標識調査結果】

雫石川河川敷の調査地は、盛岡市内を流れる3河川（北上川とその支流の雫石川、中津川）合流点に近い、JR盛岡駅対岸にあたる右岸側に設営されている。環境は周囲を農地に囲まれた、面積およそ9ha（幅約50m、長さ約1800m）のヨシ原および河畔林である。

県内陸部でまとまった面積を持つヨシ原は少なく、主に北上川とその支流河川沿いに散在して見られる程度である。3河川とも、河畔の緑地がおおよそ連続しており、鳥類の移動ルートとなっていると考えられる。北上川沿いで最も上流側に位置するヨシ原となる雫石川河川敷は鳥類の渡りの重要な中継地として機能していると考えられる。

標識調査は1974～1975年に(財)山階鳥類研究所が、ツバメ類のねぐら調査を8月に行ったことを皮切りに始められた。その後、秋の渡り時期に地元在住のバンダー（主に岩手大学野鳥の会の有志）によって調査が開始され、2004年現在に至るまで、毎年継続して行われている。

発表では、放鳥種構成の変遷を中心に、これまでの調査結果について紹介する予定である。

足島におけるウトウの標識調査

竹丸勝朗・山田洋治郎・小室智幸・鈴木一博・小松哲文

足島は宮城県牡鹿郡女川港から東に約 14 km、牡鹿半島先端にある金華山の北約 10 km に位置する無人島で、昭和 33 年「陸前江島ウミネコ・ウトウの繁殖地」として国の天然記念物に指定されている。昭和 46 年（1971）環境庁発足によって翌 47 年から始まった鳥類標識調査であるが、同 48 年（1973）から足島でも標識調査が開始された。これまでの 32 年間に協力いただいた方 28 人、延べ 170 人によって調査された記録である。

ウトウの総放鳥数 10,590 羽、内訳は新放鳥数 8,377 羽、再放鳥数 2,213 羽である。年毎の新放鳥数は昭和 58 年（1983）の 894 羽をピークに急激に減少し、平成 4 年（1992）は 169 羽と最高羽数放鳥時の 19% 弱まで激減したのである。当時日本中の海鳥は激減の途についており、特に天売島のウミガラスは平成 7 年（1995）には 20 羽まで減少し絶滅寸前となり、多くの海鳥関係者を憂いさせていた。その大きな原因はサケマス流し網等による海鳥の混獲と推定されていた。平成 5 年（1993）母船式サケ・マス漁の公海での流し網が禁止になってから海鳥の個体数は徐々に回復してきているように思っているが、足島のウトウの個体数は減少したまま横ばいの状態と思われ、新放鳥数はここ 5 年ほぼ同じである。

足島で放鳥したウトウの回収記録は殆どが魚網による混獲であり、島の周辺や仙台湾および福島県沖で 32 例ある。また茨城県沖で 2 例、遠方では島根県沖、根室沖でそれぞれ 1 例ある。さらに国外で回収されたのはサハリンで 2 例あった。また、天売島で放鳥され足島でリカバリーされたのは 6 例あったがこの逆は今のところない。福島県沖で回収されたものに水深 30 m ~ 39 m に設置された刺し網で混獲されたことが報告され、ウトウの行動生態を知るうえで興味深い。

足島でリターンとして記録された過去 10 年分を分析すると総リターン数 676 羽のうち 1 年目回収は 168 羽で最も多く、2 年目が 73 羽、3 年目以降徐々に減少し 5 年目から 15 年目頃まで 20 羽代と 16 年目頃から 20 年目 10 羽代、21 年目頃からは急に減少して 3 羽以下になっている。今年回収の個体に 32 年目が 1 羽あったことは注目したい。これらの個体は毎年回収されるのではなく、1、2 回が普通で多くとも 3 ないし 4 回であり、連続することはなく飛び飛びの記録である。今後の詳細な解析が必要と思われる。

今年の調査で放鳥後 32 年目の 1 羽を回収したがこの年、昭和 48 年（1973）は足島で最初に標識調査をした年で 216 羽に標識したうちの 1 羽であった。当時使用していたリングの材質はモネル（ニッケル／銅合金）であり、22 年以上経過すると磨耗が進み、刻印の判読が困難になってくる。昭和 62 年（1987）から磨耗が少ないインコロイ（ニッケル／クロム合金）のリングを使用している。

私たちはウトウの生存年数はよく解からないが 32 年以上生存する個体もあることは確かとなった。今年 32 年前の個体が回収されたことは、今年放鳥した 243 羽のどれかが 32 年後に回収される可能性があることでもあり、今後も継続して標識調査をすることがウトウの保護にも役立つものと思い調査メンバーは後継者の育成を求めながら来年以降も継続したいと頑張っているところである。

海岸林での標識調査

杉野目 斉

1993年9月より海岸の防風林で実施している標識調査のうち、今回は春期と秋期の調査結果について簡単に報告する。

《概要》

調査地は宮城県仙台市若林区種次字中野(38°11'N, 140°58'E)に位置する、江戸時代に仙台湾岸に植栽されたクロマツを主とした林で、林内には他にカスミザクラ、イヌシデ、シロダモ、アオキ、ヤブコウジ等が見られる。調査地付近でのクロマツの樹高は15m以上と推定される。春期調査は4月下旬～5月上旬(大型連休の期間およびその前後、調査日数8～13日/年)、秋期調査は9月中旬～12月上旬(週末ごと2～3日づつ、調査日数14～28日/年)実施している。調査にはかすみ網(長さ12mおよび6m)を用い、網は林内を流れる水路沿いの草地と林との境(春秋)、林内にある沼の周囲(春)、林と田園との境(春秋)など林縁部に設置している他、付近の小河川沿いのヨシ原(秋)にも設置している。調査は基本的に日の出前から日没後まで行い、捕獲効率を上げるため、秋の調査では状況によって鳴き声をテープレコーダーで再生して誘引を図っている。使用しているのはアオジ、メボソムシクイ、キビタキ、カラ類(地鳴き)、ノゴマ(夜間)、ルリビタキ等である。なお、春の調査時には特別な誘引を行っていない。

《結果》

春期(1994～2004年)および秋期(1993～2003年)に標識放鳥した個体は81種10709羽(春43種2168羽、秋78種8541羽)であった。このうち林縁部だけで調査を行っている春期では、最多放鳥種はアオジ(総放鳥数の21.3%)、以下メジロ(17.0%)、センダイムシクイ(8.4%)、キビタキ(7.7%)、エゾムシクイ(7.6%)であった。いわゆる夏鳥のうち放鳥数が比較的多い種(センダイムシクイ、エゾムシクイ、キビタキ、オオルリ)の飛来は4月中旬に既に始まっており、5月上旬にかけ個体数の増加が見られ、5月中旬以降に減少すると考えられた。春期および秋期で新放鳥日から6ヶ月以上経過後の再捕獲は20種249件あり、最も多いものはアオジ(84)、以下シジュウカラ(47)、ウグイス(47)であった。初放鳥日から5年以上を経過しての再捕獲例としてシジュウカラ(7年3ヶ月他)、アオジ(6年7ヶ月他)、コゲラ(5年0ヶ月)が得られた。5km以上離れた地点との移動記録(回収)は6種で得られ、そのうち県外回収が多いアオジはサハリン(1例)、北海道東部(7例)、北海道江別市(1例)、岩手県宮古市(1例)、神奈川県小田原市(1例)、静岡県沼津市(1例)放鳥の個体を回収し、種次放鳥個体は埼玉県入間市(1例)で回収された。今後更に調査を継続し、種ごとの帰還率、性・齢による渡りの動向の違い等について検討したい。



宮城県鳴瀬川河口ヨシ原における標識調査

- 2000 年～2003 年(4 年間)の記録 -

菊 田 英 孝

○調査地および調査方法の概要

鳴瀬川は宮城県の名峰船形山から加美郡、志田郡を経て桃生郡鳴瀬町野蒜海岸に流れ込む幹川流路延長 89km、流域面積 1,130km²の一級河川である。この鳴瀬川流域には河川敷にヨシ原が散在し、周辺地域の環境も豊かで、年間通して数多くの野鳥を観察することができる。河口部より 1 km ほど上部で吉田川と合流し、右岸はコンクリートで固められているが、左岸部には比較的広範囲でヨシ原が残っている。

調査地の環境は、鳴瀬川河口左岸(38°23'N、141°11'E)にある約 5.0ha のヨシ原で、一部に満潮時には地面が冠水する低湿部が散在する。周辺部にはクロマツを主体とする海岸林や田畑が広がり、付近のヨシ原内にはヤナギ類の低木も散在している。捕獲は ATX、HTX、DTX のかすみ網を用いて行い、使用枚数は年度および調査日によって異なるが、最低 5 枚、最高 14 枚で行っている。調査は 7 月下旬から 12 月上旬(8 月までは午後から日没まで、9 月以降は早朝から午前中)の週末毎(年間 31 日～36 日間)に実施している。

ポールはイレクターパイプと園芸用のポールを組み合わせて、高さを自由に調節できるようにし、地上 50cm から 2m50cm まで対応できるようにしている。また、捕獲効率を上げるために、各種(オオヨシキリ、ノゴマ、シマセンニュウ、アオジ、カシラダカなど)の鳴き声をながし誘引を行っている。

その結果、当地は県内のみならず全国的に見ても、北海道と関東以西を結ぶ渡りルートの貴重な中継地点となっていることが分かってきたので、この機会に紹介したいと考えたものである。

○調査結果

2000 年から 2003 年までの 4 年間で標識放鳥した個体は 45 種 6459 羽で、再捕獲個体は 10 種 106 羽であった。8 月中はこのヨシ原付近で繁殖または越冬したと思われる個体(オオヨシキリ、ホオアカ、カワラヒワなど)、と留鳥(主にスズメ)の放鳥数が多い。また、当ヨシ原はツバメの集団営巣としても利用されており、例年 7 月下旬から 9 月上旬までの間、夕方には多くのツバメで賑わっている。そのツバメに標識放鳥しているが、蕪栗沼で短期間回収されている。時期によって営巣を変えているのか、その個体だけなのかはわからない。

9 月の中旬よりシマセンニュウの移動がみられ、それが一段落する秋分の日以降にノゴマの移動がみられる。当地におけるノゴマのピークは 10 月の一週目で、県内でも珍しく相当数の移動が確認できる。ウトナイ湖放鳥個体の再捕獲もこの時期である。

10 月の二週目以降になると、冬鳥の移動が始まり、10 月 19 日を境にアオジが二週間かけて大量捕獲され、その後一気に収束していく。その後オオジュリンの捕獲が 12 月まで続くが、10 月中には成鳥の割合が多く、11 月の後半からはほとんどが第 1 回冬羽の個体が多くなっていき、渡りのピークは 2 回みられる傾向がある。

また、11 月後半にはコジュリン、オオセッカ、ベニマシコなどが捕獲され、12 月にミゾサザイが入ってくる頃、風の影響から調査が困難になるため、その年の調査を終了する。

再捕獲 106 羽の内、27 羽が Rt で、帰還率でみるとウグイスが 10% と高く、次いでホオアカ 6.7%、オオヨシキリ 5.4% と続いているが、オオジュリン、アオジは共に 1% 以下で、当地で繁殖または越冬すると思われる種は比較的高い数値になっているが、渡りをするものについては、調査日の関係からも回収率は下がっている。また、Rp は極端に少なく、ほとんどの種が渡りの中継地として当地を利用していることが示唆される。

再捕獲数のうち全体の約 70% は Rc で、オオジュリンが最も多い(63 例)。中でもダイレクト回収される個体は、Rc 全体の 47% と割合としては比較的高く、北海道、青森県、岩手県など、当地より北に位置する太平洋沿岸の放鳥地のものがほとんどである。県外では茨城県菅生沼、牛久沼や栃木県渡良瀬遊水池などからの再捕獲が多い。

○ 2004 年の調査と今後の課題

今年の調査は 11 月 14 日現在、調査日 8 月 22 日～11 月 14 日までの内 19 日間で実施し、新放鳥 30 種 1684 羽、再捕獲 4 種 19 羽の計 30 種 1703 羽放鳥となっている。当地初放鳥としては、マキノセンニュウ(U・A、04.09.26 放鳥)、シマアオジ(U・J、04.10.24 放鳥)があった。また、再捕獲では、当地初となるロシア、カムチャッカ州放鳥(1999.09.01 放鳥)のオオジュリンを記録した。今後も、種数や個体数の詳細な季節的変動や性・齢による傾向などを知ることや渡りの中継地としての当ヨシ原の保全に結果を反映していくためにも今後更に継続していきたいと考えている。



一 般 講 演

11 月 27 日

16:00 ~ 17:00

11 月 28 日

9:15 ~ 10:15

10:35 ~ 11:30



イワツバメの減少化と年齢

武下雅文

イワツバメは謎の鳥である。北部九州では繁殖コロニーが冬期は越冬場となる。繁殖期に成鳥、ヒナにリングを装着した個体が、同一場で数多く捕獲されることから、これらは同一集団と考えられるが、繁殖の終了した8月上旬より12月上旬迄コロニーから姿が消えてしまう。その秋期での行方が未だに不明である。長崎県川棚町、佐賀県・福岡県の県境の山間部で少数の群れを確認したが、これが秋期の生息地かは不明である。

近年、北部九州でのイワツバメのコロニー放棄が多い。1995年より標識調査を開始した京都府勝山町黒田橋（橋幅12m、長さ50m、川面より桁下まで3.9m）の大規模コロニー、開始時の1995年は220巣で、繁殖利用数は60%であったが、1998年以降はその利用率は20%となり、2002年8.9%、2003年4%と減少し、本年は177巣でその利用は僅か1巣だけで放棄が予測される。原因はバンダーの攪乱とも考えられる。

小倉南区北方大橋に1996年から44巣のコロニーが形成された。上流の郊外地の放棄コロニーから移動したものと考えられ、捕虫網で捕獲を試みたところ、予測通りのリカバリーがでた。しかしこの新コロニーは桁下が高く、1997年からは繁殖期終了後に巣数調査だけを実施し、標識調査は一切実施しなかったが、2002年の180巣をピークにその後減少し、本年は61巣となった。成鳥数も減少し、各コロニーでは8月上旬迄確認されていたが、本年は6月20日以降は成鳥は確認できなかった。また都市鳥研究会会誌では、標識調査を実施していない関東地区のイワツバメの減少化が紹介されている。

イワツバメの年齢であるが、巣内ヒナにリングを装着した個体の6年目の回収例が極めて多い。成鳥では1990年放鳥、1996年再捕獲の6歳+が1例あるだけで、6年目の回収例は無く、5年目回収が5例、4年目回収が非常に多いことから、イワツバメの生存期間は6年とも考えられる。

表1 イワツバメの放鳥数と再捕獲数

放鳥年	成鳥	Rt	ヒナ	Rt	放鳥年	成鳥	Rt	ヒナ	Rt
1989年	379	3	7		1998年	247	67	611	43
1990年	440	78	94	2	1999年	118	35	268	31
1991年	110	31	36	5	2000年	35	4	131	8
1992年	472	0	361	0	2001年	103	13	81	15
1993年	408	73	379	24	2002年	87	11	20	6
1994年	396	88	251	25	2003年	46	6	20	0
1995年	534	95	1022	31	2004年	58	8	0	1
1996年	104	97	918	38					
1997年	418	93	1477	43	計	3855	702	5737	272

標識調査で確認された鳥類の特殊な個体変異

梶田 学(京都府)

鳥類標識調査中、バンダーの常識からはずれる変な個体が希に捕獲されることがあります。そのような個体は、種や性の判別にとまどうことも多いものです。参考までに、これまで捕獲された特殊な個体変異の例から、いくつかを紹介します。

< 尾羽の枚数異常 >

ウグイス ♂・1stY 2K28419(1996/12/26 沖縄県与那国島)

: 尾羽が 12 枚ある

・センニユウ類やムジセッカ類などとの識別に注意を要するかもしれません

ベニヒワ ♂・Adult 1B19469(1996/5/12 北海道焼尻島)

: 尾羽が 14 枚ある

< 羽色の異常 >

キビタキ 性不明・1stW 1C15863(2001/09/16 京都府大文字山)

: 第一回夏羽のような羽毛が一部にある

(腰黄色、尾羽基部側半分が黒色、GC・MC 黒色)

キビタキ 性不明・幼羽から 1stW へ換羽中 1D45712(2003.08.11 京都府芦生)

: 第一回夏羽のような羽毛が一部にある(腰黄色、GC 黒色)

オオルリ ♀?・1stW 2L20932(2002/08/16 京都府芦生)

: 尾に青い羽毛がある(右-T1,5,6、左-T1~6、その他の部分は♀的な羽色)

オオルリ ♂・1stW 2T08634(2003/09/15 京都府芦生)

: 頭部に青い羽毛(外縁は褐色のふちどり)がある

ベニマシコ 性不明・1stW 2P25177(1999/11/04 新潟県福島潟)

: オレンジ色の羽色をしている

・同様な羽色の第一回冬羽個体(ガラス窓衝突死)を解剖したところ精巣が確認され♂であることが判明(1例)

< 体サイズ異常 >

カシラダカ ♀・Adult 2T81399(2003/11/01 京都府芦生)

: 矮小個体(自然翼長 68.61mm、ふしよ長 17.40mm、全頭長 27.76mm、鼻孔前端からの嘴長 7.38mm、尾長 T1;50.0mm、T3 最長尾長;52.5mm、体重 15.9g)

・自然翼長、ふしよ長、尾長、体重は、鳥類標識マニュアル(識別編)掲載のカシラダカ♀・成鳥測定値の最小値よりも小さな値を示す。

恥骨による性の識別の試み

茂田良光・中森純也

鳥類の骨盤 pelvic girdle は、哺乳類や他の脊椎動物と同様に各 2 対の腸骨 ischium、座骨 ilium、恥骨 pubis および仙骨から構成される。鳥類の骨盤は、恥骨が座骨と平行に後方に向かっており、ダチョウを除き、左右の恥骨が結合せずに離れているのが特徴的である (Campbell & Lack, 1985)。哺乳類では雌雄で骨盤の形が異なり、雌では骨盤によって構成される骨盤腔 pelvic cavity が雄より大きいことがよく知られている。鳥類においては左右の恥骨間距離が産卵のため雌で雄より大きいことが知られており、飼い鳥では恥骨間距離による性の識別がとくにオウム類で行われている (Stromberg, 1977)。標識調査の性の識別には、今まで恥骨間距離による方法はあまり用いられていないが、演者らはこの方法の有効性を確かめるために標識調査時に捕獲された鳥の恥骨間距離を測定する方法を考案し、本年、測定を試みたので、ここにその方法と結果を発表し、参考に供することにする。

恥骨間距離の間隔が広いか狭いかは、指で恥骨の先端に触れることにより、判定することができる。しかし、生きた鳥で実際にノギス等で測定することは多くの場合、不可能であり従来は、調査時に人差し指で恥骨間に触れて広いか狭いかを判断し、性の識別の際に参考とするに留まっていた。今回、考案した恥骨間距離の測定方法は次の通りである： 1) コピー機を用いて 1 mm メッシュの方眼紙を透明な粘着シートにコピーする。2) 方眼紙がコピーされた粘着シートを人差し指の爪の上に貼る。3) 粘着シートを貼った人差し指の先を左右の恥骨の先端にあて、粘着シートを上から見て人差し指に触れる左右の恥骨の先端から恥骨間距離を読み取る。

恥骨間距離の測定値は 51 種 337 個体について集めることができた。各種の測定数は多くないが、雌雄の測定値が得られた 6 種の測定値 (単位 mm) はコアジサシ：雄・成鳥 8 - 11 (n=7), 雌・成鳥 12 - 18 (n=8), キジバト：雄・成鳥 5 (n=1), 雌・成鳥 19 (n=1), ノゴマ：雄・第一回冬羽 6 - 10 (n=34), 雌・第一回冬羽 8 - 15 (n=15), ウグイス：雄・成鳥 3 (n=3), 雌・成鳥 11 - 13 (n=12), 雄・第一回冬羽 4 - 6 (n=4), 雌・第一回冬羽 8 - 12 (n=4), アオジ：雄・成鳥 4 - 7 (n=11), 雌・成鳥 13 - 14 (n=2), 雄・第一回冬羽 5 - 7 (n=13), 雌・第一回冬羽 12 - 15 (n=16), コカワラヒワ：雄・第一回冬羽 6 - 7 (n=2), 雌・第一回冬羽 12 - 16 (n=10) となり、雌雄で測定値の範囲に重複はほとんどなく、有意差が認められた。卵のサイズ (Kobayashi & Ishizawa, 1932-1940) と比較したところ、雄では卵の短径の半分以下であり、雌では卵の短径の半分以上あった。

参考文献

- Campbell, B. & Lack, E. 1985. A Dictionary of Birds. T & A D Poyser Ltd., Calton.
Kobayashi, K. & Ishizawa, T. 1932-1940. The Eggs of Japanese Birds. Rokko, Kobe.
Stromberg, L. (Compiled) 1977. Sexing all fowls, baby chicks, game birds, cagebirds. Stromberg Publishing Company, Pine River, Minnesota.

新潟市関屋海岸におけるトラツグミの移動傾向

千葉 晃・小松吉蔵・伊藤泰夫
(日本標識協会にいがたグループ)

【はじめに】トラツグミは日本国内の低山から山地の林で繁殖し、北部地方に分布するものは冬季暖地に移動するといわれ、本州中部以北には春3月頃渡来し、秋は11月下旬頃まで留まると考えられている。しかし、本種の渡りに関する情報は極めて少なく、移動の時期や経路、外部形態の雌雄差、移動時における生理成熟状態など基礎的事項は殆どわかっていない。そこで、新潟市の海岸林において1988年以来15年間にわたり収集された標識結果の中から本種に関する部分を抽出・整理し、本州中部日本海沿岸における移動傾向を分析してみた。また、標識隣接地で拾得された本種3死体の肉眼および顕微解剖結果を標識時の計測結果と合わせ、生理・成熟状態を推察してみた。

【材料と方法】調査地の位置や環境の概況は前の発表要旨に記述したとおりである。一部新鮮な死体については、摘出した臓器を5%中性ホルマリンおよびブアン氏液で固定し、常法によってパラフィン切片を作製した。そして、免疫組織化学も取り入れて染色し、光学顕微鏡下で検索した。

【結果】調査地で捕獲・標識されたトラツグミはごく少なく、15年間28季(14春季・14秋季)の調査で総計68羽に過ぎなかった。年によって調査時期や期間は異なるものの、仮に春季とした上半期の調査期間(2月～6月)で小計53羽、同じく秋季調査期間(7月～12月)で15羽が記録され、秋より春の通過個体数が多い結果が得られた。この傾向は日捕獲率(捕獲数/各季節の作業日数)の平均値(春季0.043; 秋季0.015)にもよく示された。春の捕獲期間は4月初旬から6月中旬に及び、4月中・下旬に多くの個体が標識され、一方秋は9月中旬から11月上旬に捕獲され、10月に移動する個体がやや目立った。29羽の体各部計測結果(単位mm、g)は以下のとおりである: 翼長(範囲149-166; 平均156.3)、尾長(97-113.1; 106.2)、フシヨ長(30.3-39.9; 36.1)、嘴峰長(22.0-27.0; 24.6)、体重(133-179; 151.9)。これらのうち体重に関しては、清棲(1965)の記載した値(260-278)と比べ大きな不一致が認められた。体サイズにはかなり大きな個体変異が見られるものの、解剖例から推定すると、大形個体が雄、小形個体が雌である可能性が高いものと考えられる。10月10日に拾得された新鮮死体1例(翼長163、体重165)は雄幼鳥で、皮下に大量の脂肪蓄積が認められた。また、精巢(左右合計6mg)は卵形でメラニン沈着が目立ち、ごく未熟であった。なお、組織像からみた甲状腺活動は低い状態と推察された。

新潟県瓢湖で越冬するオナガガモの性比とその変化（2003/2004）

本間隆平¹・千葉 晃²

（¹新潟県野鳥愛護会・²日本歯科大学）

【目的】一般に、鳥類の性比は遺伝的に決定され、理論上、雄：雌 = 1：1 であるが、発生初期の死亡率に性差が生じるため孵化段階で性比が偏ったり、孵化後の生存率や空間的・時間的分布の性差によって性比が偏ることも知られている。ガンカモ類における性比の偏りには、（1）繁殖期における被捕食率の性差、（2）狩猟圧に関連した死亡率の性差、（3）越冬地における分布域の性差、（4）渡りの時期に関する性差などが深く関与しているものとみられる。オナガガモでは、長年にわたるモニタリング（標識調査）により、雄比率の減少傾向が認められる生息地の例（宮内庁埼玉カモ場；杉森他、2000）も報告され、地球規模での環境汚染を視野に入れた分析が必要であるとの指摘もなされている。1998 年以来、私達は許可を得て瓢湖でカモ類の標識調査を開始し、給餌による誘引と罟（網）を組み合わせる主にオナガガモを標識・放鳥し、調査の一端を担ってきた。その過程で、本種の性比が雌に偏っていることに気づいた。そこで、本種がハクチョウへの給餌を利用して越冬している事も考慮に入れ、写真による計数法と捕獲法を併用して性比を求め、越冬期を通じた変化を追跡してみた。

【調査地と方法】調査はハクチョウの渡来地（天然記念物）として有名な新潟県阿賀市（旧水原町）瓢湖でおこなった。管理事務所の一画に手製の網を設置し、早朝より餌を撒きながら誘引・捕獲し、雌雄別に標識を付し、計数の上放鳥した（捕獲法）。また、給餌施設周辺に集結する本種を高所より写真撮影し、画面内の雌雄を計数した（計数法）。

【結果】今回は、両調査法が実行できた 2003/2004 年冬季の結果を中心に報告する。捕獲法で得た結果を 10 月下旬から 3 月中旬まで、各月を 3 期（上～下旬）に別けて追跡した結果、捕獲数（雌雄合計）/ 旬の値は 11 羽（3 月下旬）～ 458 羽（1 月下旬）と大きな変化がみられ、野外での採餌に困難が伴うと予想される厳冬期に捕獲される個体が増加する傾向が認められた。この方法で得た性比は雄比率が 6.2%～63.6%、雌比率が 36.4%～93.8% の範囲で変化し、渡来当初から 1 月下旬まで雌の高い値（73.4%～93.8%）が続いた。一方、雌と対照的に低い水準を示していた雄比率は 1 月下旬から上昇に転じ、移動末期に当る 3 月には 53.9%～63.6% に達し、雌の値と逆転した。一方、計数法で得た結果をみると、雄比率は 21.9%～54.1%、雌比率は 45.9%～78.1% の間で変化し、越冬期間を通じた雌雄の変化パターン（曲線）は緩やかなものの、捕獲法で得た変化に類似していた。



新潟県瓢湖でみられたオナガガモ *Anas acuta* (雌)の越冬地換羽例

。本間隆平・千葉晃・木下徹・山田清（瓢湖標識調査グル - プ）

「白鳥の湖」として有名な新潟県瓢湖は、昭和29年餌付けに成功し、国の天然記念物に指定された。それ以来地元市によって人工給餌が継続され、現在、最盛期にはハクチョウ類6,000羽、カモ類30,000羽あまりが越冬している。それらの中でオナガガモはおよそ3,000羽を数え、その90%が給餌に依存している。

私たちはこの瓢湖で1998/1999シーズンから標識調査を行い、これまでにオナガガモ7,800羽のほか、ヒドリガモ・コガモ・ハシビロガモ・キンクロハジロなどを標識・放鳥して来たが、2002/2003年にオナガガモ雌の中に初列風切が換羽中の個体がいるのに気付いた。そのシーズンはこのような個体を6例観察したが、翌03/04シーズンには26羽を標識・放鳥し、さらに数羽を観察している。風切羽の換羽は10月中旬から11月上旬に観察され、今シーズンも換羽中の個体を認めている。

Verheyen (1958) は初列風切の換羽の順序を7型に分け、カモ類はその第5型(同時に換羽する型)に該当し、一时无飛力になることを紹介している(黒田1962)。瓢湖に渡来するオナガガモはこの型に含まれ、一般には初列風切の換羽を終了してから渡来するものと考えられるが、今回観察した個体はむしろ異例で、越冬地での換羽例とみなされる。

Greij (1969) はミカズキシマアジ *Anas discors* の雌において越冬地に着くまで換羽が遅れるものがあることを述べており、今回オナガガモでみられた例もこれと同じである可能性が考えられる。また、03/04シーズンに換羽中に捕獲された個体が今シーズンも換羽中に捕獲され、同じ個体が越冬地換羽を繰り返すことが確認された。オナガガモは北極圏からカラフト・カムチャツカ・千島列島までの広範囲で繁殖し、繁殖地と越冬地間の遠近によって越冬地換羽を行う個体が生じる可能性も考えられる。



北日本から千葉県・鴨川漁港へ飛来が確認されたカモメ類について
(繁殖地の調査現状と、標識調査の再捕獲、目視確認の有効性)

前原 一統、前原 初子、成田 喜一、成田 章、杉野目 斉、
真野 徹、茂田 良光、利尻島・天売島 標識チ - ム 、

平成15年12月より平成16年4月の間に千葉県鴨川市鴨川漁港周辺では、北海道稚内市天売島、利尻島、北海道根室市、青森県八戸市蕪島、岩手県釜石市三貫島、宮城県仙台市、より飛来しているオオセグロカモメ (Slaty-Backed Gull, *Larus schistisagus*)、ウミネコ (Japanese black-tailed Gull, *Larus crassirostris*) をカラ - マ - キング (フラッグ、単色カラ - リング、刻印入りカラ - リング) 及び、標識リング (環境省鳥類標識調査用金属足輪) の刻印を単眼式地上望遠鏡、双眼鏡 で至近距離から読み取ることにより確認し、最長約30年 (1973年6月10日 三貫島 放鳥、2004年3月24日確認、撮影) をはじめ、約26年 (蕪島 放鳥: 複数) など長期生存したウミネコを確認した。

このたびは、その観察経緯と各マ - キングの有効性、カモメ類の情報、及び、繁殖地の調査状況、等を放鳥者と観察者の共同報告として紹介する。

We observed some gulls (Slaty-Backed Gull *Larus schistisagus*, Japanese black-tailed Gull, *Larus crassirostris*) what were marked a metal ring or a color ring or flag at KAMOGAWA-FISHERYPORT of CHIBA pref in 2004.march from 2003.november .

Gulls migrated from some island of North Japan, We found Japanese black-tailed Gull what borned 10.june.1973, and some Japanese black-tailed Gull, june 1978 or 1979.

We report about the method of research in some island, and the observation in KAMOGAWA.

仮称 利尻島・天売島標識チ - ム

長 雄一: 北海道環境学研究センタ - 、 綿貫 豊: 北大水産学部

天売島装着班・・・高木 昌興: 大阪市立大、福田 佳弘、長谷川 理、彦坂清子、

利尻島装着班・・・小杉 和樹、井関 健一、今野 怜、

ユリカモメ Black-headed Gull, *Larus ridibundus*

セグロカモメ Herring Gull, *Larus argentatus* [

オオセグロカモメ Slaty-Backed Gull, *Larus schistisagus*

ワシカモメ Glaucous-winged Gull, *Larus glaucescens*

シロカモメ Glaucous Gull, *Larus hyperboreus*

カモメ Mew Gull, *Larus canus*

ウミネコ Japanese black-tailed Gull, *Larus crassirostris*

ミツユビカモメ Black-legged Kittiwake, *Rissa tridactyla*

KABU-SIMA island(AOMORI pref), TEURI-SIMA island,RISIRI-TOU island(HOKKAIDO .pref), SANKAN-SIMA island(IWATE pref)

本年の鳥インフルエンザ関連の標識調査に西日本のバンダーが多くかわり、2004年7月10日西日本のバンダー37名が京都に集まって「鳥インフルエンザと標識調査」と題するシンポジウムを開催した。この概要を紹介するとともに、私が行った報告を紹介する。

今回の鳥インフルエンザ問題にあたって山階鳥類研究所所長山岸哲氏が「今から40年ぐらい前に、アメリカの病理学研究所の依頼で、アジア数カ国の研究機関と協力し、渡り鳥に関するウイルスや、鳥に寄生するダニ類、その他の寄生虫を調べたという記録が残っています。不幸にして、この研究は打ち切られてしまいました。今こそ、こうした取り組みが再開されるべきでしょう。」と述べているように、Migratory Animal Pathological Survey (MAPS:移動動物病理学調査)を再評価する必要がある。東南アジアの鳥関係者で当時ベストセラーと言われたマニュアルをかつて翻訳する機会があったので、そのマニュアルを通してプロジェクトの特色を紹介し、バンダーの課題を探る。

MAPS計画は、感染症研究で伝統のある米軍病理学研究所が基金を出し、H.E. McClure博士指導のもと、日本：山階鳥類研究所・琉球大学(37名)、韓国：Kyung Hee 大学(16名)、台湾：Tunghai大学、マレーシア：マレーシア大学、などアジア14ヶ国20の大学、研究所・博物館の、バンダー計171名(雇用81名+ボランティア70名)がつくったバンディングネットワークである。1963年～1971年の9年間に、放鳥総計1,216種、1,165,290羽、リカバリ235種、5601羽があり、とりまとめの報告書もきちんとでている。

MAPSの時代背景にはスプートニク(1957年)ショックがある。ロシアの宇宙計画の成功が米国の科学基礎研究(他にインターネット、生物教育の近代化など)を刺激し急に基金が得られた。米軍がかかわっていることは、東南アジアにおける存在感や合理的(戦略的)計画の進め方にプラスに働いているが、ベトナム戦争(1964～1975年)の影もあった。ソ連は回収情報を連絡したが、中国は回収情報を全く出さなかった。

以下AN ASIAN BIRD-BANDERS MANUALの目次(は特色があり注目したい部分)。

マニュアルの表紙は回収よびかけのポスター、 標識者の倫理(こころえ)一覧、生きた鳥の扱い方・カスミ網の使用法と注意点、 鳥類グループ別の捕獲法・注意点の記述、バンディング用具、 使用されるトラップ・カスミ網の張り方、 野外調査と標本(寄生虫など)採集用準備品・標本採集法、記録のとり方

1964年版のマニュアルは翻訳され手書きで青刷りされたものがある。その作業は1980年頃、織田山に出入りする京大学生が中心になって行った。翻訳者は、臼井俊二(まとめ役)、宮林泰彦、葉山政治、大迫義人、笹原裕二、前田崇雄(+須川恒)の諸氏で、臼井氏がマックルア氏から公開許可を得た。1997年に村上悟氏がファイル入力した。

MAPSのマニュアルなどを通して見えてくるバンダーの課題としては、

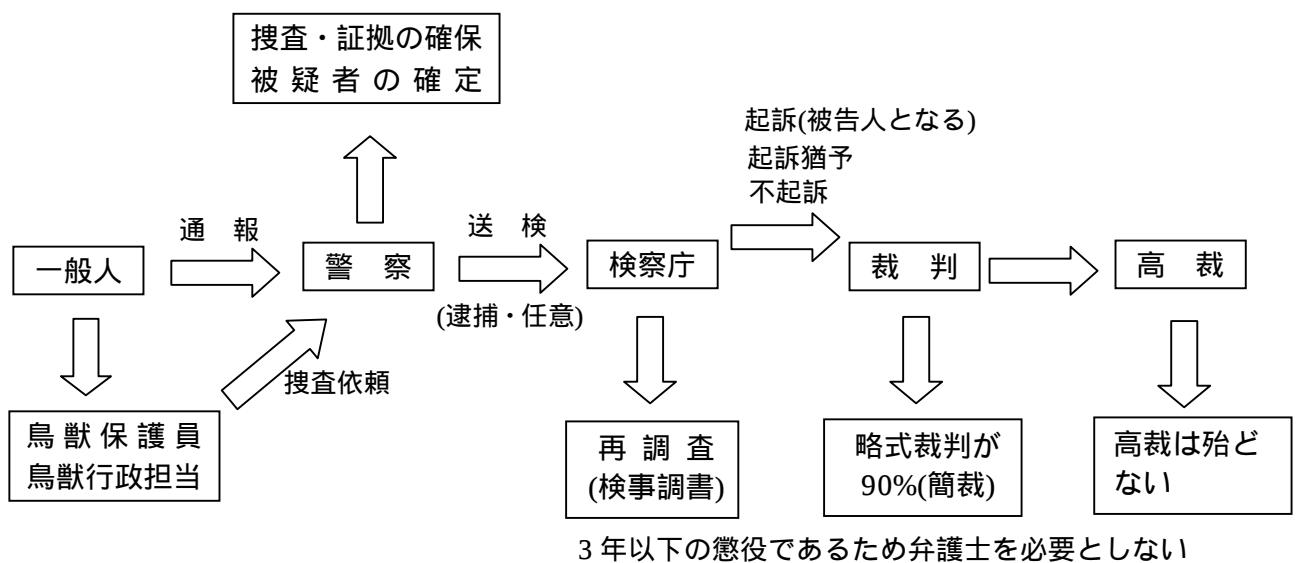
- ・東アジアにおける生捕り法の体系的把握
 - ・外部寄生虫等の系統的理解と採集法
 - ・東アジアにおける標識計画と基金確保
 - ・東アジアの人的ネットワークとコア形成
 - ・Zoonoses(人獣共通感染症)への理解を深める
 - ・マックルア氏作成のマニュアルにあるアイデアを取り入れたマニュアル作成を試みる
- などがある。

密猟問題と鳥獣保護関係法律の運用

風間 辰夫

1. 密猟とは
- 一般人
 - 狩猟免許・鳥獣捕獲許可を受けている人

2. 刑確定までのプロセス（すべて刑事訴訟法で定められている）



3. 司法権を持って捜査する人
警察官・特別司法警察員・検事事務官（検事の補佐）
4. 関係法令
鳥獣保護法・種の保存法・自然公園法・文化財保護法・民法・銃刀法・刑法
5. バンダーは一般の人よりも高い法令知識を持つことが必要である。

ポ ス タ ー 発 表

11 月 28 日

10:15 ~ 10:35



印旛沼の鳥類

箕輪義隆（日本鳥類保護連盟調査室）・○桑原和之（千葉県立中央博物館）・三沢博志（船橋市北図書館）・鈴木 明（環境省・野生生物）・奴賀俊光（千葉大海洋セ）・小林大光（八千代市）・米持千里（千葉市野鳥の会）・田中忠義（八千代市）

印旛沼はガン・カモ類の有数な渡来地であった。ただし、湿地の埋め立てや住宅地の造成などによる改変が著しく、その変遷に伴い鳥類相も変化した。現在でも首都圏では、印旛沼は湖沼で生活する水鳥の重要な渡来地である。しかしながら、個体数変動や鳥類相を長期間、調査している例は少ない。鳥類相の変化は著しいとはいうものの印旛沼では、どのように変化したかはまとめられていない。少なくとも、鳥類相の変遷を把握するためには出現種の目録の作成は必須である。広域の湿地の鳥類の出現種をまとめるには、多くの労力がかかるため単純なリストも作成されていないのが、現状である。1974 年に東邦大学野鳥の会が外来種を含む 109 種の報告をし、その後 1990 年に 132 種の野鳥のリストが作成されている。その出現種のコメントは、感覚的な記載である場合が多く、カウント結果などに基づいた客観的な記述ではなかった。本報告では、現地で行った 1999 - 2004 年の観察結果を基に、千葉県立印旛・手賀自然公園の鳥類相を把握することを目的とし、印旛沼北部調整池・印旛沼西部調整池・甚兵衛広沼およびその水田地帯で鳥類の出現目録を作成した。

印旛沼およびその周辺の湿地や水田、斜面林で水鳥類の調査を行った。その観察結果を基に、印旛沼北部調整池・印旛沼西部調整池・甚兵衛広沼およびその周辺の鳥類の出現種の記録をまとめた。また、印旛沼およびその周辺で確認された種の記録を全て収集した。収集にあたっては、アマチュアの観察者の観察記録や文献の中から印旛沼から記録を全てリスト・アップした。主な観察記録は 1970 年代から 2004 年までの約 30 年間で、標本なども含めると 241 種が確認された。241 種の中でカモ類、クイナ類、シギ・チドリ類など水辺で生活する種類が多く記録された。また、その中には 8 種の外来種が含まれた。千葉県内では 1960 年代まではアカモズは観察されていたようであったが、印旛沼では明確な観察記録が得られなかったため参考種とした。

印旛沼北部・西部調整池では、1970 年代以降、カモ類が優占していた。カモ類の中でも、種により個体数に大きな変動が見られた。Anas 属の多くに増加の傾向があり、マガモは 3500 羽、カルガモは 1200 羽、コガモは 3500 羽が記録された。1970 年代は数羽しか記録されなかったヨシガモは大きく増加し、約 350 羽に増加した。キンクロハジロ、ホシハジロ、ホオジロガモが減少した。1984 年頃からサンカノゴイが継続して繁殖している湿地は、国内では報告されていない。北部調整池や甚兵衛広沼で繁殖しているサンカノゴイが、採食のため印旛沼周辺の水田を利用していることも明らかになった。また、甚兵衛広沼では渡りの時期のチュウサギや越冬期のチュウビの塀が、ヨシ原に確認された。特にチュウビの塀は 1980 年代から継続されている。甚兵衛広沼の渡りの時期のサギ類の塀は、2004 年 10 月 7 日に約 1300 羽にも達し、その中に 442 羽のチュウサギが観察された。

このような水鳥の生息地は、国内では少なく貴重な湿地であり、人為的な開発は湿地で生活する種を減少させる。水辺の鳥類の保護を考える上では、鳥類の変遷の調査は欠かせない。鳥類を計画的に保護するには、どのような種が生息しているかを調べる必要がある。サンカノゴイの繁殖地やチュウビの塀の保護のために、道路などの建設は極力回避すべきである。

印旛沼のチュウヒとハイイロチュウヒの生息状況

箕輪義隆・桑原和之・浅川裕之（千葉市野鳥の会）・奴賀俊光（千葉大・バイオ）・小田島高之（千葉県立中央博物館）

湖沼やそれに隣接したヨシ原などの湿地は、湖沼で普通に見られた。1980年代以降、国内の湿地は急激に減少している。湿地の減少とともに、水辺で生活する種の個体数も減少し、それに伴い、保護に対する関心が高まってきた。湿地で生活するチュウヒやハイイロチュウヒは、千葉県内では、東京湾岸の湿地で普通に越冬し、繁殖例もあった。本種は、東京湾岸から姿を消し、千葉県各地で激減した。また、印旛沼では個体数は減ったといわれているが、チュウヒ類は毎年記録されている。著者らは印旛沼および調整地に隣接した湿地や水田で、1980年代から鳥類の調査を行っている。現地で行った2003-2004年のチュウヒ類に関する観察結果をまとめ報告したい。

千葉県立印旛手賀自然公園の印旛沼北部を調査地とした。調査範囲は、印旛沼北部調整地、甚兵衛広沼およびその水田地帯を含む周辺である。印旛沼北部調整地とその周辺部、および甚兵衛広沼の3地域に分けた。調査地では、2003年から2004年までの個体数の調査を行った。印旛沼北部調整地および甚兵衛広沼の周辺部の調査地では、重複して個体数を数えないように自動車を用地帯を計数した。見落としがないように時速10km以下で低速走行し、本種の個体数を全て数えた。8倍から10倍の双眼鏡と20倍から45倍の望遠鏡を用いて行った。印旛沼北部調整地および甚兵衛広沼の水面では、定点から全ての個体数を数えた。また、夕方、堀での個体数の調査を行った。

印旛沼北部調整地と甚兵衛広沼およびその水田地帯を含む周辺では、甚兵衛広沼で堀が確認されたため、個体数が最も多く26羽が確認された。印旛沼北部調整地でも水面で14羽、周辺では15羽が記録された。ハイイロチュウヒも周辺の水田で堀が確認された。水田の堀では最大5羽が記録された。印旛沼北部調整地では、堀は確認されなかったが、甚兵衛広沼では、堀が確認された。2003年10月29日に11羽を確認した。2003年12月7日に25羽になり、2004年1月11日に、甚兵衛広沼の堀では個体数が最も多くなり、26羽を確認した。1月11日は、16:35頃に、ヨシ上空を9羽が飛翔していたが、40分には、11羽に増加した。50分には、水面近くに4羽が休息し、ヨシ原上空に22羽が旋回していた。その後、上空を飛翔する個体は減少し、水面にいた個体も17:09には堀に入ったため、見られなくなった。2月以降個体数は減少し、4月7日には5羽になり、5月2日には1羽も記録されなかった。2004年の繁殖期には、甚兵衛広沼で2羽のチュウヒが確認されたが、営巣は確認されなかった。9月20日には、まだ堀は形成されていなかった。

チュウヒは湿地に広く分散し、日中小動物を採食する。日中は、餌を探し捕らえ、捕食し、夕方、堀を形成する。したがって、チュウヒが記録される地域では、堀がとられているはずである。調査地以外から、千葉県内の湿地に生活するチュウヒの堀の報告例はない。20羽以上が報告されている地域はない。調査地で確認された堀は、1980年代に確認されてから、現在まで継続されている。極めて貴重な地域といえる。調整池の護岸からのヨシが、最も広がる地域が、この堀が形成されている地域にあたる。この地域に、人工物が増設されると堀が消失すると予想される。また、湿地の営巣環境は、年により大きく変動する。繁殖の有無は、単年度で結論をだすのではなく、数年のモニタリングが必要であろう。

資 料

西日本バンダー交流会シンポジウム「鳥インフルエンザと標識調査」概要報告

須川恒・脇坂英弥・有馬浩史(企画者)

2004年7月10日午1時～5時

於：ペアーレ京都(京都市上京区)

参加者37名。

西日本バンダー交流会は、西日本のバンダーが研修や交流を目的に年1回ほど集まっている会である。西日本を中心とする(最近は全国の方が参加している)バンダー同人誌「アルラ」の関係者が中心となっている。

今回のシンポジウムの目的は社会的にも大きな問題となっている鳥インフルエンザ問題と標識調査のかかわりについて、いくつかの観点から話題を出し合って、バンダーの課題を探ろうとしたものである。

バンダーには標識室を通して山階鳥類研究所所長山岸哲氏より「バンダーの皆様へ」という鳥インフルエンザなど感染症にからむ鳥類の総合調査へ協力を呼びかける文が配布された。ほぼ同様の内容を山岸氏は朝日新聞やNHKでも発表しており、それらは以下の山階鳥類研究所のホームページから読むことができる。

http://www.yamashina.or.jp/tori_influ/index.html

今回の企画の目的はこういった呼びかけに応えようとしたものでもあった。

まず、鳥インフルエンザの概要や野鳥とのかかわりなどについて鳥取県の医師でバンダーの吉田良平氏が基調講演を行なった。

・吉田良平「高病原性鳥インフルエンザと鳥類標識調査」

人獣共通感染症においてバンダーは特異なハイリスク集団であることを自覚し、鳥から感染することを警戒するだけでなく、標識調査によって鳥が感染症をこうむる危険を自覚せよとの指摘があった。つまり鳥に触れた後に手を洗おうだけでなく、鳥に触れる前に人のほうが手を洗う必要がある。

鳥インフルエンザの発生経過や鳥を扱う際の注意点については、日本鳥学会鳥インフルエンザ検討委員会でもとりまとめをして日本鳥学会和文誌と日本鳥学会の以下のホームページで公表されており参考となる。

http://www.soc.nii.ac.jp/osj/japanese/birdflu/birdflu_main.html

バンダーと鳥インフルエンザのかかわりで大きかったのは、山口・大分・京都の3ヶ所の発生地近くで野鳥への感染の有無等を確認するために環境省の緊急標識調査が実施され、西日本在住の多くのバンダーが協力した点である。この調査の生々しい経験談を調査協力者から聞いた。

・片岡宣彦「山口県阿東町における標識調査」

尾崎清明氏からの依頼電話にはじまった。小鳥類を考慮した採血手法がまだできていなかった。

た。

・武下雅文「大分県九重町における標識調査」

留鳥が多かったがなんとか捕獲できた。雪が降ったり低温であり、資料採取や計測などでかなり小鳥類にストレスがかかるので、おそい夕方の捕獲は避けたほうがよいと感じた。

・有馬浩史「京都府丹波町における標識調査」

捕獲後の処理の場所の確保など調査の体制はかなりできていた。調査期間中にカラス類の感染が明らかになり、保健所へ行ってタミフルを処方してもらうなど緊張した場面があった。中川宗孝氏より、農場裏にあったカラス類の埒地を佐藤文男氏と探索した話の紹介があった。

鳥インフルエンザと野鳥とのかかわりでは、カラス類への感染が大きな問題となり、対策をとる上でカラス類の行動圏が大きな話題となった。この点に関して大阪府北部(今回感染カラスの死体が確認された茨木市を含む)で研究をしていた中村純夫氏の話聞いた。

・中村純夫「カラスの埒行動と行動圏」

カラス類の年間の埒地形成行動からみて、農場で感染したカラス類がかなり移動する可能性があるのかを推測し、さらに感染実態の解明のためには性や年齢判別の情報が重要などの課題を示した。カラス類の移動については、このような行動に加えて、マスコミのヘリコプター取材などによる攪乱も考慮する必要があるとの指摘が会場からあった。

このような標識調査の結果も含め、農水省のホームページに高病原性インフルエンザ感染経路究明チームの報告書が掲載されている。

<http://www.maff.go.jp/tori/20040630report.pdf>

究明チームのメンバーの一人であった金井裕氏から、渡り鳥がウィルスを運んだ可能性がある」と報告書に述べられている点について説明を受けた。

バンダーにとって最大の関心事は、標識調査の際にどの程度感染に注意して対処する必要があるかであった。これは感染症の危険度に応じて対応するということにつきる。鳥インフルエンザに関して、東南アジアの系統に較べると日本で広がった系統は危険度が低かった点が指摘された。もちろん今後広がる系統がどのようなものかについては、新たに留意する必要がある。

その後、鳥インフルエンザだけでなく、感染症と標識調査という観点で二人が講演を行なった。

山岸氏も指摘していることだが、環境庁が1972年から本格的に標識調査をする前に日本の戦後の標識調査の開始時点で重要だったのは、1960年代中ごろにはじまった東アジアにおける米国(米軍)主催のMAPS(移動動物病理調査)プログラムだった。感染症への幅広い関心の中で東アジアのフライウェイについて考えて行こうとするプログラムの遺産をバンダーは意識する必要がある。

この観点で当時東アジアの鳥関係者でベストセラーであったと言われている「アジアバンダーズマニュアル」について、1980年頃に標識調査に関心を持つ学生達と翻訳作業を行った経験からその特色について紹介があった。

・須川恒「AN ASIAN BIRD-BANDERS MANUALについて」

MAPSでは外部寄生虫を体系的に調査するという内容が含まれていた。最近西日本のバンダー間ではシラミバエやウモウダニ類がホットな話題になっており、体系的な調査をどのようにすればよいかにについて兵庫の片岡宣彦氏に、黒木知美氏からの情報を含めて講演いただいた。

・片岡宣彦・黒木知美「鳥類の外部寄生虫採集のススメ ウモウダニ・シラミバエなど」

外部寄生虫を採取した際に連携すべき国内研究者が紹介された。